

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2007年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院	社会学研究科	社会学専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名	氏名	
	社会学部現代文化学科・教授	阿部 珠理 印	
<b>自然・人文の別</b>	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	<b>個人・共同の別</b>	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 1名
<b>研究課題名</b>	現代のメキシコ市で生きる先住民の生活世界に関する研究		
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	社会学研究科社会学専攻・博士後期課程2年	岸下 卓史 印	
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
<b>研究期間</b>	2007	年度	
<b>研究経費</b>	200	千円	

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究の目的は、今日のメキシコ市に移住した先住民の様相を明らかにすることである。本目的を達成するために、筆者は、メキシコ市に8月に渡航し、およそ1ヶ月間の現地調査を行った。メキシコ市における具体的なフィールドは、ソナロッサ、ソカロ、地下鉄イダルゴ駅付近、レフォルマ通りなどのメインストリート、先住民の法律研究NGOのオフィスであった。調査方法としては、これらの調査地点で協力を依頼した25人の先住民から、一人あたり20~30分かけて聞き取り調査を行った。調査対象者が“先住民”であるかどうかは、両親が先住民語を使用するかによって判断した。以上のような調査の結果、先住民は①「没頭型」と、②「同化型」と、③「馴化型」に区分できることが明らかになった。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ メキシコ市への移住 ] [ 都市的生活様式への適応 ] [ 都市への3通りの適応 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

筆者は、2007年の8月にメキシコ市でおよそ1ヶ月間のフィールド調査をおこなった。調査の概要は以下のようなものである。フィールド調査はアンケート用紙を用いて、必要に応じて追加のインタビューをおこなうというかたちをとった。インタビューの際にはボイスレコーダーとデジタルカメラは、協力者の警戒心を解くために使用しなかった。調査地はメキシコ市のさまざまな地点(主に、ソナロッサ、ソカロ、地下鉄イダルゴ駅付近、レフォルマ通りなどのメインストリート、先住民の法律勉強会のNGO)であり、街で偶然出会ったインディヘナと思われる人物に調査を申し込むことや、現地の日本人から紹介されたインディヘナに調査をお願いすることや、先住民のNGOのオフィスで調査への協力を頼むこともあった。その結果、25人のインディヘナの人々から、1人あたり20~30分かけてアンケートをとり、アンケートで聞き取れなかったテーマについて話を聞くことができた。調査に際して、アンケートには筆者が自分で書き取り、聞き取りづらい場合のみ調査対象者に書いてもらった。ちなみに、インディヘナかどうかは、“両親が先住民言語を話す”という条件によって判断した。つまり、メキシコ市移住の結果、インタビュー協力者がスペイン語を話し、ほとんど先住民言語を使用できなくなっている場合も、その場合は先住民と判断した。ちなみに、特にストリートで調査に協力してくれたインディヘナは、すべて民族衣装を着用するなど、外側の標識から判断したため、調査対象が偏ってしまった感は否めない。調査の結果得られたデータの概要は以下のようなものである。

- ①性別：男性(13)、女性(12)
- ②年齢：10代(5)、20代(9)、30代(4)、40代(3)、50代(2)、60代(1)、70代(1)
- ③エスニシティ：ナワ族(6)、オトミー族(5)、トリキ族(4)、マサテコ族(2)、ミシュテコ族(2)、サポテコ族(2)、マサウア族(1)、チナンテコ族(1)、チョ Choltec 族(1)、ツェルタル族(1)、不明(1)
- ④職業等：幼稚園の先生、大学生(2)、ストリートの売り子(9)、ガス配給員、小学生、教師、オーガナイザー、翻訳家、民芸品の職人、民族文化パフォーマー、メイド、料理人、建設現場の左官、ストリートチルドレン(2)、警備員、農民、ミュージシャン、民族運動家、露天商
- ⑤教育歴：初等教育(13)、中等教育(8)、高等教育(4) \*各項目修了・未修了含む
- ⑥言語：スペイン語(25)、ナワ族(6)、オトミー族(5)、トリキ族(4)、マサテコ族(2)、ミシュテコ族(2)、サポテコ族(2)、マサウア族(1)、チナンテコ族(1)、チョ Choltec 族(1)、ツェルタル族(1)、不明(1)
- ⑦出身：オアハカ州(11)、ケレタロ州(4)、ヴェラクルス州(2)、イダルゴ州(2)、プエブラ州(2)、ゲレーロ州(2)、チアパス州(1)、ミチョアカン州(1)
- ⑧現住所：メキシコ市(20)、メキシコ州(5)
- ⑨生活満足度：満足している(22)、満足していない(3)
- ⑩インディヘナ・アイデンティティ：肯定的評価(19)、否定的評価(3)、その他(3)

調査の際に使用した調査票の内容及び補足的な質問項目を以下に示す。まず、調査票は以下のとおりである。

Pregunta1: ¿Es usted hombre o mujer?

Pregunta2: ¿Cuántos años tiene usted?

Pregunta3: ¿Es usted Indígena o Mestizo?

Pregunta4: ¿A qué se dedica usted? (Por ejemplo, Oficinistas, Vendedores, Estudiantes)

Pregunta5: ¿Cuál es su nivel de instrucción? (Por ejemplo, Primaria completa, Secundaria completa, Medio superior completa)

Pregunta6: ¿Cuál lengua sabe hablar usted? (¿Lengua indígena? ¿Español? ¿Anbos?)

Pregunta7: ¿De dónde es usted? (Por ejemplo, este común, Guerrero, Oaxaca)

Pregunta8: ¿Ahora vive usted en Ciudad de México?

Pregunta9: ¿Ahora está usted satisfecho con su vida? (¿Por qué?)

Pregunta10: ¿Quiere usted vivir como Indígena también en un futuro?

以上のような調査票の質問項目とは別に、調査の進捗にともないこの10項目のみの調査方法に限界を感じたため、その後インタビューにアレンジを加えて補足的な質問もおこなった。問い9 (Pregunta9. 今あなたは自分の生活に満足していますか。[その答えに対して]なぜそう思いますか。) や、問い10 (Pregunta10. 将来も先住民として生き

### 研究成果の概要 つづき

たいですか) などのみでは、調査協力者の生活のリアリティ、つまり生活の実態に迫る上では不十分であった。つまり、この質問を投げかけただけでは例えどんなに彼ら(彼女ら)との意思伝達が上手くいっても、彼らの生活満足度やアイデンティティを深く理解することは困難である。そのため、このような問題意識から軌道修正したインタビュー調査によって、調査日程の後半で8人の調査協力者(主に、先住民NGOのオフィスで調査を行った人々)から、“メキシコ市にはたくさんお金を稼ぐために来ているのか?”、“一生メキシコ市で生活するつもりか?”、“近い将来、生まれ故郷に戻る予定か?”、“メキシコ人としてのアイデンティティとインディヘナとしてのアイデンティティではどちらが強いか?”、“そちらのアイデンティティが強いのはなぜか?”、“メキシコ市にやって来てからあなたの民族アイデンティティは変化したか?”、“どのようにあなたのアイデンティティは変化したか?”といった質問項目を追加して、比較的インテンシブな調査をおこなうことができた。

以上のような調査によって得られた知見を次のようにまとめた。

25人の先住民からインタビュー調査を行って、彼らの持っている都市への態度や先住民アイデンティティに対する態度の相違から判断して、彼ら(彼女ら)を3つのタイプに大別できることがわかった。この都市生活への態度の違いや民族アイデンティティに対する態度の違いは、主として個々の調査協力者の職業や教育歴や使用言語といった変数の影響から生じていると考えられる。分類は、主として彼らの従事している職業や着用している衣服に沿っておこなった。

まず、第1のタイプ(11人)は、その多くが民族衣装を身につけたストリートの売り子(9人)、また露天商(1人)、メイド(1人)である。彼女ら・彼ら(以下、“彼ら”と省略)は、総体として、インディヘナとしての自己肯定感が強く、“先住民の貧しい生活が嫌だ”と答えた人物(Xさん)と、“先住民として生きたくない。苦しまないようにメスティーソと結婚したい”と答えた人物(Oさん)、2人を除いた全員がインディヘナとしての自己を肯定していた。このタイプの先住民は、全体として教育歴が短かったが、11人中2人のみが高校まで卒業していた。また、3人の人物には家がなかった。全体として、経済的な貧しさの印象の強いグループである。ただ、11名中8名が既婚で、先住民の妻(夫)を含む家族がいるために幸せであり、自分が先住民であることを不幸だと思わない、と語った。これらの分析から、第1のタイプの先住民は、主として相対的ではなく、絶対的な意味で先住民アイデンティティを保持していたということが言える。彼ら(彼女ら)の多くが農村から現金収入を求めて都市に出稼ぎに来ており、稼げるだけで幸せという意識があった。同時に、出身の故郷との精神的な結びつきも強く、都市に生きながら、故郷(農村)とのつながりのなかで生きていくように思えた。つまり、このタイプの先住民は都市的生活様式には順応せずに、都市にしながら故郷の先住民文化に「没頭」しているのである。

次に、第2のタイプ(9人)の特徴は、民族衣装を着用せず通常のメキシコ市民と同様の格好をしている点、教師、翻訳家、大学生(2人)、NGOオーガナイザー、民間警備員、農民兼民族運動家、建設現場の左官、民族文化パフォーマー兼民芸品職人といった職業に就いている点、その多くがタイプ1と比較して安定した収入を得ている点である。また、教育レベルが高等教育3人、中等教育3人、小学校2人(それぞれ修了・未修了含む)と比較的高い点も特徴である。言語面では、彼らはスペイン語に堪能である。民間警備員であるUさんは、両親共にナワ(Nahua)族でありナワ族の言語であるナワトル語(Nahuatl)を話せるにもかかわらず、スペイン語しかは話せなくなっていた。職業柄、タイプ1のグループと比較して、メキシコ市でよりフォーマルな地位を得ているため、メキシコ市の社会との結びつきは強い。こうした彼らは、都市的生活様式によく順応しているながら、同時に先住民としての自己をポジティブに評価しており、彼らが都市民であることと、先住民(村人)であることを意識のなかで両立させていることが見てとれた。先住民としての自己を否定せずに都市に馴染んでいることから、彼らは「馴化」した先住民であると言える。

最後に、第3のタイプの先住民(4人)について述べる。職業(等)は、大学生、ガス会社従業員、ストリートチルドレン(2人)であった。このタイプは格好はタイプ2に類似しているが、そのメンタリティはまったく異なる。つまり、先住民としての自己アイデンティティについての考えがまったく異なるのである。“メスティーソとして生きることができる”と答えた大学生や、明確に“メスティーソになりたい”と答えたガス会社従業員や、“自分たちはもうメキシコ人だ”と答えたストリートの子供たちがいた。彼らは、1910年のメキシコ以来、政府の国民統合政策のなかでメキシコ人として生きることを要求され、それを受け容れた「同化」型の先住民なのである。

以上のように、調査データから3つのタイプの先住民の存在を明らかにした。従来は、出稼ぎ目的でメキシコ市に移住し、ある程度の現金を手にする故郷に帰っていたタイプ1と、都市移住の結果完全にメスティーソ化してしまったタイプ3が都市の先住民研究の対象になってきたが、タイプ2のような先住民の出現を調査によってある程度明らかにすることができた。

※ この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

③ 立教大学大学院社会学研究科 2007年度第5回院生例会、報告題目:「先住民であることと都市で生きること——都市先住民への質的調査の検討」、開催日:2007年11月24日、開催場所:立教大学池袋キャンパス 8号館 8303教室。